

テキサス州の視覚障害教育

—テキサス州立盲学校調査報告—

新 井 千賀子

(視覚障害教育研究部)

はじめに

テキサス州立盲学校は、アメリカのなかでもその変革をもっとも成功させた盲学校の一つではないかと考えられる。テキサス州の特殊教育学校はこの盲学校1校のほかに聾学校と重度重複障害児のための学校が各1校あり、それらは全て州都であるオースティン市内におかれている。盲学校は州の一つのエージェンシーとして州の教育庁(TEA : Texas Education Agency)からも独立して州全体の視覚障害教育に関わっている。従って、盲学校として子ども達を直接教育する事業と州全体の視覚障害教育に関する事業の双方をおこないテキサス州における視覚障害教育のセンターとなっている。州立盲学校と地域の公立学校との関係は、極めて機能的なシステムをもち、視覚障害教育のサービスがテキサス州立盲学校を中心とした地域にまでりめぐされた毛細血管のようなイメージを与えるものであった。学校の名称はTexas School for the Blind and Visually Impairedで一般的な盲学校の英訳 School for the Blindとは違った名称になっている。これは1975年の全障害児法の制定後テキサス州立盲学校では重複障害がある視覚障害児童生徒が増加し教育内容もそれにあわせて変化した。名称を学校の内実と適合したものにかえるために1998年にあえてVisually Impairedという全盲だけでなく幅広く視覚障害を含む名称にしたものだということである。本稿では、その意味の違いを尊重してテキサス州立盲学校をTexas School for the Blind and Visually Impairedの略称TSBVIとさせていただいた。

TSBVIの特色

TSBVIが公立盲学校のなかで一つのモデルとして注目されているのはいくつかの理由がある。その一つは、統合教育との共存に成功している点である。合衆国全体が統合教育の推進とともに单一の視覚障害児童生徒の在籍が減少した。その結果、教育対象を教科教育だけでなく多様なニーズのある他の障害がある視覚障害児童生徒まで拡大できなかった多くの盲学校が閉鎖されていった。TSBVIはこうした中を確実に変革を遂げいわゆる盲学校のセンター化を実現しているからである。特色としてのポイントは以下の点である。

- 1) Outreach programによる州全体の視覚障害教育への関与
- 2) 地域の学校に在籍する視覚障害児への柔軟な支援体制(Short term ProgramとSummer School)
- 3) 基本的教育カリキュラムであるcore curriculumに視覚障害に特化したカリキュラムを付加したexpanded core curriculumを提唱し実践している。
- 4) 視覚障害と他の障害をあわせ持つ子ども達へのカリキュラムの実践。
- 5) 自立と独立を目標にした多様なニーズに対応する移行教育プログラム(EIXT Program, Post Secondary Program)

TSBVIが取り組んでいる事業は学内で視覚障害教育を提供するだけなく多岐にわたっている。全体の事業の概要を表1.にまとめた。本稿では、近年の我が国の盲学校の最大課題となっている盲学校のセンター的機能にかかる1)のOutreach programと2)のShort term programおよびSummer schoolについての詳細をテキサス州全体の視覚障害教育とあわせて述べる。これらの詳細を述べるまえに、TSBVIの学校としての事業であるComprehensive Programの一部を紹介する。

TSBVI Comprehensive Program

TSBVIでは、盲学校に在籍して教育をうけるプログラムをComprehensive(包括的、総合的な)Programとよんでいる。現在の我が国の盲学校と同じように敷地内の寮に生徒が居住して教育をうける形式である。在籍は2003年1月の統計で145名となっている。そのうち50名が点字使用、24名が拡大文字使用、4名が通常文字使用となっている。聴覚教材を使用しているのが16名で、文字使用前段階にいる生徒が19名、点字および拡大・通常文字の使用ができない触覚シンボルによるコミュニケーションをしている生徒が38名である。この統計から推察すると、145名のうち26%が重度の重複障害がある生徒であることがわかる。盲ろうの生徒で教科教育ができるレベルの生徒はテキサス州では聾学校に在籍し、盲学校には知的障害をともなう盲ろうの生徒が在籍しているためこの26%には盲ろうの生徒も含まれていると考えられる。また、34%が全盲もしくは点字使用が必要な視覚障害程度、19%がいわゆるlow vision(弱視)

表1 TSBVIで行われている主な事業一覧

盲学校に寄宿もしくはある期間滞在して行われる教育事業	Comprehensive Program	総合的なプログラム
	Summer School	サマースクール
	Short Term Program	短期プログラム
	EXIT(Experiences In Transition)	移行プログラム
	Post-Secondary Program	中等教育後のプログラム
州内全体の視覚障害教育に全体に関わる事業	Outreach Statewide Instructional & Parent Support	州内の教育および保護者支援
	Statewide Systems & Standards for VI Students	州内の視覚障害学生のためのシステムと規準
	Statewide Staff Development	州内スタッフの教育
	Statewide Student Registration	州内の視覚障害学生の登録
	Facilitation of Teacher Prep	教育養成の促進と支援
その他	Instructional Materials Center	教材教具センター
	Research & Development	研究と開発
	Website	ホームページ
	Curriculum Development	カリキュラム開発と出版

であることが推察される。(聴覚教材使用の理由が視覚障害の程度によるものなのかについては不明である。また、日本でいう下学年適応および軽度の重複障害児は文字を使用するカテゴリーにふくまれているため、実際には26%以上の視覚障害以外の障害を重複している生徒が存在する。) TSBVIに27年在職し在籍生徒の対応やIEP作成のコーディネート、予算の獲得などを行うStudent Service (学生課) に勤務する職員によると在籍数は、1975年以降に統合教育が推進されはじめたころから減少し、重複障害がある生徒の割合が増加していることということがあった。すくなくとも1980年ごろは、オーケストラが演奏できるだけの学生と人数がいたということである。重複障害のある生徒の増加とそれに対応するTSBVIの教育内容の変化、統合教育の推進のなかでのセンター化という新たな事業の導入は、当時の教科教育を中心に行っていた盲学校にとって大きな変化であったという。

教員は全て視覚障害教育の資格をもち、常勤の教師が29名と補助教員が17名いる。教員の他のスタッフは歩行訓練士8名（教員の資格は不要であるが歩行訓練士の資格が必要である。我が国では歩行訓練士の資格がないため教員が歩行訓練をおこなうがここでは歩行訓練士が中心となって行われる。）、理学療法士、作業療法士、言語療法士、カウンセラー、臨床心理士、ジョブコーチなどの専門職が配置されている。尚、TSBVIのOutreach Programや寮、レクレーションセンター等その他のサービスに従事するスタッフ全ての総計は350名である。

対象年齢は、6才から22才でこれらの生徒は全てARD (Admission, Review, and Dismissal) 会議1）の過程をへて盲学校に在籍している。ARD会議は、特殊教育のサービスをうけるための過程の一つでサービスの提供の認証やIEPの作成に関与する機構である。障害がある子どもの保護者と教育関係者によって構成される。盲学校での教育が必要となる場合には保護者と盲学校と在籍もしくは管轄の

学校区などの担当者によるARD会議によってその必要性がみとめられなければならない。また、このARD会議は、盲学校から地域の学校に戻る際にも必要となる。TSBVIでは、地域での教育の重要性を考え在籍してうける教育の目標が達成された場合には地域の学校に戻ることを促進している。従って、地域の学校で学ぶ生徒が視覚障害に特化したある領域の教育を必要とする場合（点字の読み書き、歩行訓練、コンピュータ操作など）ARDがみとめれば一定の期間（2～3年）盲学校に在籍して教育をうけることができる。このシステムを利用して、地域の学校とTSBVIをニーズに応じて往復することができる。

教育のカリキュラムは表2. に示すとおりである。生徒の実態に応じておおまかに4つのカリキュラムがある。実際の時間割と個別のカリキュラムはもっと複雑なものであった。これらのカリキュラムは、1975年の全障害児法、(1990年にIDEA : Individual Disabilities Education ACTに改正された) によって統合教育が推進され、障害のより重度な重複障害のある生徒の在籍へのニーズが増加したことへ対応したものである。在籍生徒が单一障害で教科教育の提供のみで盲学校が機能していた時代から重複障害がある生徒の在籍が増えた時代の変化に対応し、提する教育の内容を教科教育中心の形態から、重複障害を念頭においた幅広い内容に新たに構築する必要があった。この転換が、TSBVIが統合教育と共に存する一つのポイントとなったという。（重複障害がある児童生徒への教育カリキュラムはカリキュラムコーディネータによって集約されTSBVIの出版物となってている。この出版部門はTSBVIの一つの収入源になっている。）また、上記の地域の学校とTSBVIの両方の教育サービスを受けられるシステムも同時に構築されてきた。さらに、現在はTSBVIに在籍中でも教科教育レベルの生徒は地域の公立学校へ通いながらIEPに示された内容をTSBVIで学んでいる。

表2 a. Comprehensive Programのカリキュラム：盲学校に在籍して行われる教育のカリキュラム

Special Area 他の障害の有無	Academic 全ての生徒対象	Elementary Concepts 単一障害	Practical Academic 単一および重複障害	EXIT Program 重複障害がある生徒も含む	Basic Skill 重複障害
対象年齢	全ての生徒および学年	6-22才	6-12才	12才以上	18-22才
内容	Expanded core curriculum*に基づいた視覚障害に特化した教育や生活スキル(例えば、歩行訓練、コンピュータ操作や、れクレーションも含まれる)	本人の当該学年レベルの2年以内の学習ができる生徒対象：通常の学校のカリキュラムを行う。多くの科目を近隣の学校で学ぶ。	6~12才の単一または重複障害があり、academicプログラムレベルの学習のレディネスに到達しようとしている生徒対象	年齢よりも発達が2年以上遅れているが少なくとも幼稚園レベルの読み書きができる生徒対象	Practical Academicプログラムの生徒を対象とした移行教育プログラム
K=6 12 18 22					

表2 b. Comprehensive Programのカリキュラム：
地域の学校に在籍する視覚障害生徒が盲学校に
滞在して学ぶ場合のカリキュラム

他の障害の有無 対象年齢	Short Term Program	Summer Program	Post-secondary Program
	単一障害	単一／重複障害	
6-18才	6-18才	18才以上	
内容	教科学習ができる生徒が対象となる。1週間程度の滞在で集中的に視覚障害に特化した内容を行う。	1~2週間、滞在する。内容別にコースがもうけられておりそれぞれのニーズに対応したプログラムを行う。TSBVIに在学していない生徒対象。	高等学校卒業資格がある生徒を対象におこなわれる移行教育プログラム。生活スキルや歩行訓練、就労経験などをとおして最終的には一般就労を目指す。TSBVIに在学していない生徒対象。
経費	無料：旅費は学校区が負担。その他のTSBVIが負担。	無料：旅費など保護者が負担。その他はTSBVIが負担。	無料：
年齢	K=6 12 18 22		

Comprehensive Program の特徴は上述した内容の他に、

- 1) 社会性の獲得と自立を目標に寮での教育と余暇活動にも重点をおいている
- 2) EXIT (Experience In Transition) : 18才以上の生徒

の移行教育カリキュラムがある点をあげることができる。

1) の寮での教育は、寮そのもののデザインをより一般的の家の形式にリフォームし4つのベットルームとリビング、キッチンを1ユニットとする形に変えている。現在、この形式をより一般的の家に近付けるために新たな寮を建築中である。Basic SkillsやElementary Conceptのカリキュラムの生徒たちはこの寮で、朝食や身支度などの指導を教員からうけて歩行訓練士の指導をうけながら登校するということが行われている。また、余暇活動はレクレーションセンターが敷地内にあり、カラオケやビリヤードなどの設備と地域社会で提供される活動（障害者スポーツやヨガ教室など）に参加できるように送迎のサービスをおこなっている。さらに、家族との関係の継続についても努力をおこなっており、入寮に際して帰省の頻度とその手段について家族と契約を行う。この、帰省のプログラムにかかる費用はすべて無料となっている。

2) のEXIT programは18才以上の生徒に学内の寮に居住し教員およびジョブコーチの指導のもとで就労経験をしながら成人の生活形態へ移行していくカリキュラムである。学校に在籍しながら殆どの時間を教室以外の場所で過ごし、コンピュータなど必要な科目だけを履修しに教室に行くことになる。

TSBVIの予算規模は年間、およそ1千500万ドルでそのう

ち約1千200万ドルがこのComprehensive Program（後述するShort term PrograとSummer schoolの経費もこれに含まれる）が当てられている。州政府からの予算がこのうち約80%で残りが様々なプログラムに対するグランツや学校区からの収入であるということであった。州政府からの予算獲得のためには2年ごとに州政府に対して事業実績説明を行う必要がある。この報告には在籍する生徒への教育効果や事業の方法と結果および計画について詳細なデータと資料が要求される。2004年はその申請の年度にあたり8月に申請する準備を1月から開始していた。また、予算は現在、昨年に比べて10%削減されており厳しい状況にあるということであった。

テキサス州の視覚障害教育の概要

TSBVIの事業はテキサス州の視覚障害教育を統括しており、その中心となるのがOutreach Programである。この事業は、州の教育機関との連携のうえで遂行されている。Outreach Programの事業を説明するまえに、前提となるテキサス州全体の視覚障害教育のシステムを簡単に説明する。

対象年齢

テキサス州において視覚障害があるばあいには0才から21才までの教育的サービスをうけることができる。（アメリカでは、日本でいう高校まで義務教育となっているが特殊教育を受けている場合には州によってばらつきがあるが21才まで延長できる。この州によるばらつきは、義務教育を開始する年齢が州によってばらついているからである。

関係機関

テキサス州の視覚障害教育にかかわる機関としては、本稿の主題であるTexas School for the Blind and Visually ImpairedのほかにTEA (Texas Education Agency : テキサス教育庁)、TCB (Texas Commission for the Blind : テキサス盲人委員会) がある。TEAの下部組織にESC (Education Service Center : 教育センター) と1,100の学校区がある。それぞれの役割を以下にします。TSBVIは、ESCとの連携の上で行われる事業が多くなっている。

TEA: 州の教育をすべて包括して管轄する機関（通常教育も特殊教育も含む）

TSBVI: TEAとは独立して州の視覚障害教育を包括する機関および、盲学校の経営を行う。事業内容は表1. に示すように多岐にわたる。

TCB: 主に成人の視覚障害者を対象としたリハビリテーションと職業教育を行う。子どもへのサービスとしては、

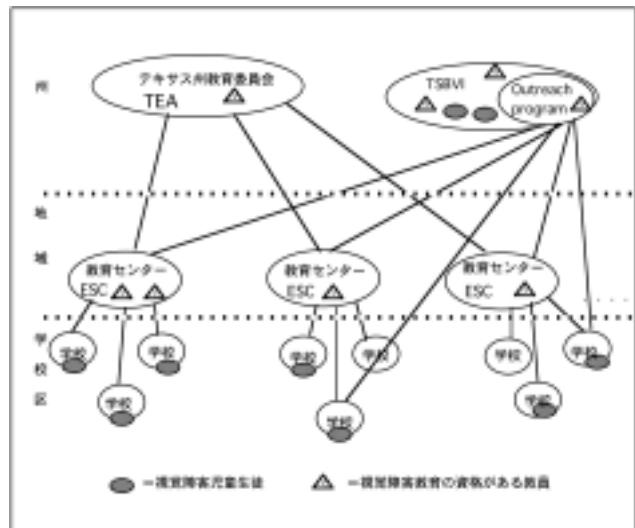


図1 TSBVIと州教育委員会(TEA)、教育センター(ESC)、地域の学校の関連図

10才以上の子どもを対象とした職業教育のプログラムがある。この一部はTSBVIと連動して行われている。

ESC：州を20の地域に分割し、各地域にESCがおかれ領域ないの教育すべてを包括して管轄する。このESCには少なくとも1名の視覚障害教育の視覚をもったスペシャリストを配置することが州法で定められおり、管轄内にある学校区の視覚障害教育にあたる。TSBVIのOutreach programはこのESCとの連携で行われている部分が多い。ARD会議や特殊教育のプログラムに関する管轄内への支援や障害乳幼児の発見と支援の提供など特殊教育の様々な役割を担っている。現在、いくつかの障害領域を優先的ににしたこととされており視覚障害はその優先障害に含まれている。

TSBVIとTEA、ESCの関係は、図1. に示すとおりである。これらの体系をとおして、TSBVIは地域の学校区で教育を受ける視覚障害児童生徒にたいして、教材教具の提供や教育方法の支援などをおこなっている。

視覚障害児童生徒の登録

テキサス州では、毎年1月の第一月曜日に全州の0才から22才の視覚障害児童生徒の登録を行う。この登録には、盲ろうも含まれている。2004年の登録手順の冊子によると登録の目的は、

- 1) APH (American Printing House for the Blind)^{④)}からの教材の連邦政府の財源の準備、
- 2) 児童生徒にTEAの教科書管理部門において、児童生徒に点字および拡大教科書の使用資格をあたえる、
- 3) 視覚障害に特化したニーズに対する供給資金によって行われるサービスを可能にする資格をあたえる、



a. 左が通常の教科書（数学）、右が拡大教科書（歴史）



b. どの教科書（通常も拡大も）裏表紙に貸し出し履歴をかく欄がある。



c. 通常の教科書（数学）



d. 拡大教科書（歴史）

図2 通常の教科書（数学）と拡大教科書（歴史）

4) 地域、地方、州全体のプログラム計画を促進するため、となっている。この登録は、学校区をとおしておこなわれる。

登録の対象となるのは公立学校および私立学校にいる生徒（0才から22才）で1) カレッジレベル未満の教育プログラムに参加している生徒、2) IEP (Individual Education Program) およびIFSP (Individualized Family Service Plan) に登録されている生徒である。IFSPの対象となる視覚障害乳幼児はARD委員会もしくは、IFSPチームが判断をする。また、対象児は他の障害（知的障害、学習障害、肢体力不自由、聴覚障害など）が重複する視覚障害児も含む、3) 週20時間以上の教育プログラムをうけIEPまたはその他の教育プログラム（社会教育と余暇プログラムは含まれない）をうけている22才以上の成人

これらの児童生徒の過去3年の眼科医またはオプトメトリストの診断書が学校区で保管される。（ただし、全盲や眼科的所見に変化がみられないといわれるばあいにはARDによってその過程を除外することができる。）

この登録フォームでは、学年や視力および視覚障害の状況、重複障害の状況の他に教科書と使用文字や歩行訓練を定期的に受けているかどうかについてきいてある。特に、教科書と使用文字については第一使用教材と文字と第二使用教材と文字を調査している。我が国では、教科書は点字教科書を無償支給されるとその他の形態の教科書は無償で

は入手できない。テキサスにおいては教材供給において複数の教材を入手することができ、点字教科書と拡大教科書または点字教科書と録音教科書などという組み合わせで入手することができる。ただし、これらの教材はすべて貸与になっており終了後は返却することになっている。したがって全ての教科書には書き込みを禁止することと、使用者の履歴がわかるラベルがはられている。また、拡大教科書は基本的に通常の教科書を単純に書く大したものでモノクロのものであった（図2.）。これらの分類を表3. に示す。コンピュータと光学機器がこの第二使用教材のカテゴリにふくまれている。

TSBVIのOutreach program

Outreachの和訳は名詞として「伸すこと、対象者のすそ野を広げる活動」動詞として「…の先まで達する、広げる、伸びる」とある。支援を地域まで伸ばすというような意味合いととらえられるが適訳がないので英文表記のままする。

TSBVIでは、地域で学ぶ生徒の増加にともない視覚障害のある子どもたちのニーズに対応するためにこのプログラムを開始した。このプログラムは盲ろうをふくむ視覚障害のある子ども達への支援とその両親および教育関係者への支援を行う。事業の予算は、年間約300万ドルでうち20%が州政府からの予算で80%ちかくが連邦政府からのグラント

表3 視覚障害生徒登録表で生徒が使用する教科書／教材の文字の種類の項目

第一選択の教科書と学習手段 教科書のタイプ		
教科書を使用する場合	点字	
	拡大文字	
	通常文字	
	聴覚教材	(たとえば録音教科書など)
*これらの教科書を選択する場合には学年レベルを記入する。		
学習手段のタイプ		
文字の使用段階に達していない場合	pre-brail reader	IEPもしくは学習メディアプランによって点字の前段階の指導を視覚障害教員からうけることになっている生徒
	pre-Reader	拡大もしくは通常の文字による学習へのレディネス段階で現在は文字をよんでいない
	non-Reader	点字、拡大および通常の文字、録音教材をしようせず将来も使用することがないと考えられる重度の生徒。触覚シンボルでコミュニケーションをおこなう生徒がふくまれる
*乳幼児については、どのカテゴリーに将来ふくまれるかを想定する。		
第二選択の教科書および教材		
視覚教材	点字やオーディオ教材を第一教材として選んでいるが、通常の文字のある場面では読むことができる生徒	
点字	拡大教科書などを主に使用しているが点字がある場面では使用する生徒	
聴覚教材	点字や墨字を使用しているがある場合には聴覚教材を使用する生徒	
コンピューター	他のメディアによる学習をしているがコンピュータによる作業をすることがある生徒	
光学機器	光学機器（拡大読書器を含む）を使用する生徒	

表4 Outreach Programの主な事業

	内容	期間	対象年齢
Vocational Program	SWEATという教科教育ができるacademic レベルの生徒を対象とするコースと、WALICという他の障害もある生徒を対象とするコースがある。実際の就労体験と家族と離れて自立した生活をする経験を行う。	SWEAT 5週間と春に2泊3日のPre-SWEAT をうけたWALIC 4週間	SWAET 17-22歳 WALIC 16-22
Enrichment Program	年齢に相当した学習できるacademic レベルの生徒を対象とするコース(Seconday Enrichment)。他の障害もある生徒で日常生活がおおむね自立していく、指導に従うことができる生徒を対象としたコース(Functional Enrichment)がもうけられている。前者のSeconday のコースには就労体験を含んだVocational と以前参加したことのある生徒wお対象とした同窓会的なコース(Gathering)がもうけられている。	2週間のプログラムと5日間のプログラムがある	内容によって6-22歳の間で年齢区分をしている
Life Skill Camp	発達の遅れがある生徒を対象とする。このコースのもくてきは、年少の生徒たちは、両親以外の人との関わりを経験することと、同じグループの年長の生徒との出会いをもつことである。美術、音楽、ちょっとした料理などの活動を小グループで行う。	5日間	5-22歳
Senior Sport Camp	年長の生徒が対象で、陸上、水泳、室内体操、レスリング、ゴルフなどを健常者同様に参加できるようなトレーニングを行う。このプログラムは、アメリカ合衆国盲人スポーツ選手協会に登録する必要がある。また、視覚障害が重篤である生徒、スポーツに強い希望がある生徒でトレーニングに参加できるだけの身体的能力があるものが優先される。	4日間	13-18歳

である。

Outreach Programの事業の一覧を表4. に示す。

このプログラムの主な事業は、学校区やESCにおける視覚障害および盲ろう教育の支援である。この支援には、

- 1) 学校区内の視覚障害教員、保護者、ESCの依頼で実際の学校およびESCなどに職員が出向いて直接行われる
- 2) ESCなどで現職教員研修に関する支援を行う
ものの2つのタイプがある。

- 1) 学校区内の視覚障害教員、保護者、ESCの依頼で行なう支援

おもに、直接担当者に電話で依頼がくる。これらの依頼をうけると担当者はあらゆる事前情報を収集したのち学校に出向いて授業をオブザーブし担当教員とのディスカッションを行って問題解決に取り組む。必要があればESCとも連携をとる。この支援の費用負担は、TSBVIが受け持つことが前提である。しかし、近年、予算の削減をうけて旅費についての負担を学校区に可能な限り依頼し、資金の潤沢な学校区からは旅費を負担してもらっているということであった。(但し、負担ができない学校区には従来どおりTSBVIが負担している。)

- 2) ESCなどで現職教員研修に関する支援

これには、TSBVIが企画をして行う場合とESCが企画をおこなって講師として依頼がくる場合がある。前者の場合には、Coordination of Statewide Staff Developmentの担当者がTSBVI内外の講師をコーディネートする。後者の場合には、ESCが企画をする。この場合、旅費等の負担はESCが行うがそれ以外については無料となる。

この、事業に携わっている職員は、視覚障害で乳幼児担当が1名、それ以上の年齢の担当が3名であった。盲ろうは、乳幼児が1名、それ以上の年齢の担当者が3名であった。20のESCが管轄する地域がそれぞれに配分されて担当していた。

この部門の部門長へのインタビューで、これらの部門の教員の適性や採用方法についてきいたところ、視覚障害教員の資格をもつことは前提条件あるということだった。その他の条件としては募集する職務について求められるスキルをみたしている人材をそのつど採用することであった。

視覚障害と盲ろうの担当者それぞれ1名にインタビューの機会を得たのでその内容をしるす。

視覚障害担当者のインタビューによると月に4回程度の頻度で学校に出向いているということであった。昼までに学

校到着し、授業をオブザーブしたのち両親、教師、視覚障害教員と話し合いをもつというのが一般的なパターンであるということであった。必要な場合には家庭訪問をおこなうこともあり、支援先によっては宿泊が伴うことになる。彼女によると、学校に出向いて行う支援よりもむしろ大変なのはその後の報告書の作成ということだった。これには個人差があると思うが一回の訪問で、報告書を作成するのに1日程度かかるということであった。ESCの現職研修に関しては、いくつかのESCがTSBVIと契約をしていてそこで講師を行うということであった。

盲ろうの担当とのインタビューではESCにはすくなくとも1名の盲ろう専門家がいるが、盲ろう教育に対する教員資格がないため支援に関する専門家の養成と支援者を増やす目的で彼等の支援を理解した特別な人材の養成が必要であるといっていた。TSBVIでは2003年より、テキサス州の盲ろうの統計の業務をおこなうことになったということであった。現在、テキサス州の0~22才の盲ろうは687名であるということだった。

上記の事業の他に特色としては以下の点があげられる。

- 1) テキサス州の視覚障害児童生徒登録をになっており、その統計から視覚障害教員と歩行訓練士の将来的ニーズを予測して州内の2大学と連携をして教員養成を行っている
- 2) また、その登録事業によって州内の視覚障害生徒への教材供給をおこなっている。この教材は全て貸与であり終了ご返却されまた別の生徒が使用することになる。
- 3) 教員と歩行訓練士に指導員を2~3年つけ、教員養成の卒後教育をおこなっている。
- 4) 家族への支援を直接おこなっている。

Short term program と Summer school

この二つのプログラムは、TSBVIに在籍していない生徒を対象としたものである。視覚障害はほかの障害種別に比して人口がすくなく、地域の学校で学ぶ視覚障害のある生徒は同じ障害のある生徒にできる機械が非常にすくない。また、視覚障害に特化した生活上のスキルや学習方法などを学ぶ機会が十分にない場合がある。そうしたニーズに答える位置づけで設置されている。

Short term Program

このプログラムは4年前に始まりComprehensive Programの一部として位置づけられているが、独自の寮と教室、教員、予算をもち在籍している児童生徒の教育とは別に行われる。対象となるのは、TSBVIに在籍していない地域の学校で教育をうけている視覚障害児童生徒である。

表5. Short Term Programの一覧

Short term Program	内容
IEP Classes	short term プログラムの中心となるクラスである。ニーズと対応した視覚障害に特化した内容のカリキュラム（Expanded core curriculum）集中的に学習する。必要があれば、両親、教師も参加できる。小学校、中学校、高校の年齢別に募集をおこなう。
Independent Week	年齢に対応した自立した生活のスキル（社会性、コミュニケーション、移動、テクノロジーなど）をみにつける。その他に、目的として同じような障害のある生徒と出合い交流するということがあげられている。木曜の夜に開始され日曜に終了する週末だけのプログラムがある。
Technology week	中等教育レベル（12歳以上）を対象とした、支援機器の使用について学ぶ。JAWZ, Zoomtext, Braille Lite等の使用やインターネット、e-mailなどを行う。個人の目標にそって行われる。またIEP classesにおいても昨日によって行われる。
Adaptive Tools&Technology For Accessible Mathematics	中等教育をうけていて代数もしくはより進んだ数学の学習をすることになっている生徒を対象とする。グラフの作図、触図の読み方、音声科学計算機などについて学ぶ。通常学級のなかで視覚障害生徒が数学学習ができるような道具について学ぶ。
Issues in Low Vision	中等教育レベルの弱視生徒を対象とする。自己主張、教室での協調、補助具、学習メディア、歩行など弱視に関係することで社会生活、心理的な問題も取り上げる。
Ushers Weekends	中等教育をうけているアシシャー症候群（視覚と聴覚の両方の障害がある）の生徒を対象とする。Outreach部門と連携をとって行われる。日頃お互いにあうことのない同じ障害をもつ生徒との交流を行う。
Space Vision weekends	中等教育レベルの生徒を対象とし、テキサス大学の宇宙財團と連携して行われる。宇宙や天文学について学ぶ、「A NASA Braille Book of Astronomy」を使用する。

このプログラムの特性上、重複障害のないAcademicsのカリキュラムができる生徒であることが条件となる。担当教員は、常勤3名と1名の補助教員（非常勤）である。このプログラムはTSBVIの実践のなかで盲学校に長期に在籍しなくとも短期間で集中して効果をあげられる科目や生徒が存在していることを反映して開始された。また、学校区では十分に対応できない視覚障害教育の技術に対するニーズに対応する目的もある。従って、内容はある科目について集中的に（5日間）TSBVIに滞在して学習するものである。この費用の負担は、旅費を学校区が負担する以外はTSBVIが負担している。

2004年のプログラムと内容を表5. に示す。

Summer Prpgram

このスタッフは、Short Term Programと兼務になっている。学校がある期間はShort term programをおこない夏休み期間はサマースクールを担当する。サマースクールの対象者は、TSBVIのサービスをうけていない地域の学校で学ぶ視覚障害及び盲ろうの児童生徒である。障害の状況や目的別にコースが用意されている。このサマースクールの教員は、TSBVIの教員を雇用する場合もあるが州内外の視覚障害教員を雇用している。（アメリカ合衆国では、夏休みの間については教員は他の職につけることになっている。）費用は旅費を保護者が負担しその他の大部分をTSBVIが負担する。また、一部の職業体験プログラム等にかんしてはTCBが保護者に支援をしている。表6. に2004年のサマースクールのプログラムと概略を示す。本年度は予算削減をうけプログラム数を減らさないかわりに各プログラムの日数を減らすことで対応したということであった。

特徴的なののは、SWEAT (Summer Work experience in Austin) と WALIC (Working and Living in the Community) と呼ばれる職業体験プログラムである。SWEATはAccademicsカリキュラムレベルの生徒対象で、

TSBVIが契約している企業（ラジオ局、博物館、レストラン、ハウスキーピングなど）へ一人で公共交通機関をつかつて通勤する。生徒2名に1名の割合でジョブコーチがつく。WALICはPractical Accademicsレベルの生徒で、グループでSWEAT同様にTSBVIが契約している企業や商店で就労体験をする。1グループに1名以上の割合で指導者がついている。

視覚障害生徒は人数が少ないためこうした就労経験や自立経験を専門家の指導のもとで受けることが難しい。このプログラムはこうしたニーズに答えるものである。

終わりに

TSBVIの訪問が決まってから、事前調査で何度もTSBVIのホームページhttp://www.tsbvi.orgを閲覧していた。ホームページそのものがかなりのボリュームがありその全てを把握することがweb上では非常に骨がおれる作業であった。実際に訪問してその学校と事業の規模が思った以上に大きいものであった。1975年の全障害児法（1990年にIDEAに改正される）よって、最も制約の少ない教育環境を提供するという考えがとりいれられ、統合教育が推進されるなか、常に変革をつづけていた学校という印象をもった。本稿では、そのほんの一部を現地の調査と参考文献、TSBVIのホームページから得た情報とあわせて紹介した。現在、我が国の盲学校もかつてのTSBVIと同様センター化もしくはセンター的機能をもつことを望まれている。それぞれの背景には法律や社会構造、教育システムなど多くの違いがあるが、今後の我が国の盲学校の発展にわずかでも参考になれば幸いである。本稿ではふれなかったが、TSBVIでは地域の高等学校を卒業した生徒を対象に移行教育プログラムの一環で、TCBと共同であらたなプログラムであるPost Secondary Programを開始している。視覚障害教育をうける当事者のニーズと時代の背景にこたえ的

確に変化している盲学校といえるだろう。

この調査は科学研究費補助金の補助をうけて行われた。この調査に協力いただいた方々全てにお礼を申し上げると同時に、新学期が始まって直後の訪問を快く受け入れて下さったTSBVIのDr. Phill Hatlen氏ならびに全てのスタッフにお礼を申し上げます。

参考文献

1) 千田耕基, 主要国の特別なニーズを有する子供の指導

に関する調査研究, 科学研究費補助金研究成果報告書, 国立特殊教育総合研究所, 2002

- 2) M. Cay Holbrook et al. Foundations of Education Second Edction Vol. 1 History and Theory of Teaching Children and Youths with Visual Impairments. AFB Press., 2000
- 3) 落合俊郎監修, 世界の特殊教育の新動向, 日本精神薄弱者福祉連盟, 1997
- 4) Phil Hatlen 2003 The Role of Schools for the Blind in inclusive Education, The Educator, Vol 16,40-44,2003

Summary

Texas School for the Blind and Visually Impaired (TSBVI) is regarded as a special school succeeded in promoting inclusive education. TSBVI provides a variety of on-campus services as school for the Blind as well as provides outreach services which covers entire state.

Having these two different functions has promoted the value of TSBVI as special school under the steady move toward inclusive education. Special schools in Japan are searching their way toward assuming new function as a resource center. TSBVI may serve as good model.

